

- 7 : 45, 1975.
- 11) 谷本潔昭 : 膠原病と補体, 臨床免疫, 6 : 179, 1974.
 - 12) Romeo, R. G. et al. : Intra-arterial administration of Reserpine, Arch. Intern. Med., 125 : 825, 1970.
 - 13) Willerson, J. T. et al. : Reserpine in Raynaud's disease and phenomenon ; short term response to intra-arterial injection, Ann. Intern. Med., 72 : 17, 1970.
 - 14) Farmer, R. G. et al. : Prognostic significance of Raynaud's phenomenon and other clinical characteristics of systemic scleroderma, Circulation, 21 : 1088, 1960.
 - 15) Dubois, E. L. et al. : Duration and death in Systemic Lupus Erythematosus, J.A.M.A., 227 : 1399, 1974.

あ と が き

編集顧問 島田 信勝, 中谷 隼男, 斉藤 溥
 編集同人 卜部美代志, 杉江 三郎, 織畑 秀夫, 佐野 圭司
 牧野 永城, 菅原 克彦, 阿部 令彦

癌治療の基本的なものは、依然として外科療法である。最近、化学療法が発達して、これが癌治療の相当の部分占め、放射線療法、免疫療法がそれぞれ癌治療の少部分をうけもつている現況である。

しかし、一部の癌を除き、外科療法のみで癌の治療成績の飛躍的の向上を期待できないことは万人の認めるところである。

近来、比較的有効度の高い抗癌剤が登場し、それを用いての外科療法の補助療法が考えられ、その近接成績が次第に報告されるようになっていく。胃癌に関しては、胃癌研究会の全国統計でみると、ことに進行癌において、切除に化学療法を加えた群と、加えなかつた群との間で遠隔成績にあまりパツとした差異がないという。この点についてはなお種々の面から長期に亘つて検討を要するものと思う。

外科療法に加える補助化学療法を放射線療法と同じく局所療法としてとりあげるか、あるいは、化学療法の本来の目的とされる全身療法としてみるかについては、各領域においてそれぞれ議論があろう。筆者は、胃癌に関しては、全身療法とすべきであると考えている。ただし、胃癌治療の成績は、当然遠隔成績に求めなければならず、局所効果の有無で、最終的判定をすることはできないからである。

本号では、進行胃癌の化学療法の特集を企画し、治癒切除例に対する併用化学療法、非治癒切除例に対する併用化学療法、切除不能例に対する化学療法を組み、これに内科側からみた進行胃癌の化学療法(綜説)および切除不能胃癌に対する動注化学療法を加えた。さらに、伊藤一二先生の司会になる基礎と臨床の立場から胃癌の化学療法についての座談会記事を配した。

ここに、主として外科の立場からみた進行胃癌の化学療法の実状を示して皆様のご参考を供したい。
 (卜部美代志)

担当 大島, 伊東, 向山